

保育学の初学者を対象とした保育者特性及および 社会人基礎力に関する省察の特徴

太田 研*¹・鳥居美佳子*¹・古屋祥子*¹

キーワード：保育学生、保育者特性、社会人基礎力、省察

1. 問題と目的

近年、都道府県や政令指定都市等において保育士や幼稚園教諭、保育教諭といった保育者を対象に、多様なキャリアを前提としつつ採用段階・初任者・中堅者・管理職者の各ステージにおいて求められる資質能力を育成指標として示し、育成指標に応じた研修体系が提案されている^{1) 2)}。保育者を対象とした育成指標は、「保育者としての資質向上研修俯瞰図」³⁾や「保育士の研修体系」⁴⁾において萌芽的に策定され、教育職員免許法の改正や保育士等キャリアアップ研修の制度化にともない現在の発展に至っている。

保育者育成に関する目下の課題は、養成から採用、研修までの円滑な移行であろう。これまでは採用段階から整理してきた育成指標を、高等教育機関等における養成段階から連続的に示すことで新採ギャップ⁵⁾に起因する早期離職を防止できると考える。とりわけ、少子超高齢社会による地域機能や世帯構造の変化、気候変動による自然災害や新たな感染症のパンデミック、人工知能によるビッグデータ活用時代の到来など、世界は予測困難な時代にいる。このような時代を生きる子どもたちに必要な資質能力が見直され、教員に求められる資質能力および教員養成大学におけるカリキュラムが改めて検討されている⁶⁾。

時代の変化に応じて保育者に求められる資質能力が変わろうと、保育者が自身の実践や資質能力を省みて、今後の実践や研修受講の指針を立てる省察は、専門性向上を支える基盤となる。杉村・朴・若林⁷⁾によると、省察は「自己や他者の言動・認知・感情を観察し分析・評価するとともに、それらに基づいて目標や計画・予測を立て制御すること」と定義されている。保育実践という直接的な経験を基に気づきを得る水準、気づきの集合体を分析・評価して計画や予測という抽象的な認識を産出する水準、抽象的な認識の集合体から洞察や見通しを深める水準が想定されている⁸⁾。保育実践にかかわる資質能力を高めるためには、経験年数だけでは不十分であり、省察が下支えする⁹⁾。

省察は、高等教育段階から養成することが可能である。例えば、荒井¹⁰⁾は保育士養成課程の第1学年から第3学年までの学生に、省察尺度⁷⁾を用いて、授業前後の尺度得点の変化を測定した。その結果、子どもとの関わりに必要な知識・技術に関する講義や演習を受けた後は、省察尺度の得点が有意に上昇した。ボランティア時間の量的な違いによる有意差は見られなかったことから、経験を通して学びにつなげる授業の質が求められる。荒井¹⁰⁾の他にも養成課程の学生を対象に、量的¹¹⁾または質的¹²⁾に省察の向上につながった授業実践が報告されている。

ところで、養成段階の学生の多くは青年期の発達段階におり、自己概念を大きく変えていく。千島¹³⁾によると、自己の変容に対する志向性は青年期に変遷する。大学生は中学生や高校生に比べ、

(所 属)

* 1 山梨県立大学 人間福祉学部

内省や自尊感情が高まるにつれて、現在の自己が変わることも変わらないことも両方のメリットを評価できるようになる。志向性の内容は、中学生では学業知識や達成、他者と自己の要求を調整する対人的調和の変容を志向する者が多いが、大学生では粘り強く努力するといった精神性、自分らしさなどの個別性、生活上の管理について変容を志向する傾向が高くなる¹⁴⁾。さらに、現在の自己の変容（私は____という自分を変えたい）のみならず、理想の自己への変容（私は____という自分を____に変えたい）を具体的にイメージし、変容のための計画を持つことでアイデンティティが形成されていく¹⁵⁾。

省察は自己の言動・認知・感情を観察し分析・評価する過程であるため、アイデンティティ探求過程における自己概念の変容の影響を受けるであろう。養成段階の学生の多くはアイデンティティ探求の段階におり、現在の自己を肯定したり、理想の自己を具体的にイメージし、変容の計画を立てたり、理想の自己を模索したりと様々な過程を経験している。学生の発達段階に応じて、保育者としての省察を高めるカリキュラムの編成および授業内容の改善を図ることで、養成から採用、研修までの円滑な職能発達につながるが見込まれる。内省や自尊感情の高まりにより、変わらないことのメリットも評価できる特徴をふまえると、省察に関して単一の姿を目指すよりも、学生が自己の省察特徴を理解したうえで現状維持や理想自己への計画立案を選択できる指導が望まれる。

学生の省察特徴に関する先行例として、太田・遠藤¹⁶⁾は、特別支援学校教育実習を終えた学生の省察特徴について、実習課題の達成状況に関する自己評価の高群・低群ごとに検討した。実習日誌に記述された日々の反省に対してテキストマイニングを行ったところ、自己評価高群の学生は自身の指導行動や児童の反応といった客観的な作用過程を対象に省察し、低群の学生は実践中の思考という意識的な内面過程を省察していた。つまり、自己評価の低い学生は杉村ら⁷⁾の提唱する気づきから抽象的な認識を産出する高次の省察を行っていたため、達成状況を低く見積もった可能性がある。

太田・遠藤¹⁶⁾や養成段階の学生の省察を対象とした研究の多くは、実習や体験的学習後の省察を対象としている。しかしながら、高等学校から高等教育機関に入学したばかりの学生は、内省や自尊感情が高まる過程にいる。入学後の初年次教育から学生が自分自身の肯定的側面を受け入れ、否定的側面にも対峙することで、大学におけるアイデンティティ探求の第一歩を踏み出すことができるであろう¹⁷⁾。そこで本研究では、幼児教育・保育学を専攻する初年次の大学生を対象に、自己の特性、大学卒業時に目指す長期目標、長期目標を達成するための短期目標に関する記述から学生の省察特徴を探索することを目的とした。初年次の学生は子どもとかかわる経験に個人差が大きく、幼稚園や保育所等での体験的学習が始まったばかりであるため、従来の省察尺度にあるような子どもとかかわりに関する質問項目への回答は困難であると考えた。代わりに、初年次でも回答が可能な保育者の行動やパーソナリティ傾向、保育者以前に社会人として必要な資質能力を測定する尺度を用いた。

2. 方法

(1) 参加者 参加者は、A大学において幼児教育・保育学を専攻する第1学年の学生31名であった。男子学生8名、女子学生23名が所属していた。最終的にデータに欠損のない30名分を対象とした。参加者のなかに社会人を経験した学生はおらず、高等学校卒業後にA大学に入学した。本研究のデータ収集前に、教養科目として外国語や運動、情報機器の活用に関する科目を履修していた。幼児教育や保育学にかかわる専門科目としては、教職に関する基礎的な科目、保育内容に関する科目、乳幼児の発達に関する科目を履修していた。A大学入学前の保育現場での体験的学習については、中学

校の職場体験や高等学校の授業の一環で数日間の体験をしたことがある者がいたが、全ての参加者が体験しているわけではなかった。A大学に入学した後は、サービスマーケティングの形態で、隔週に1回、幼稚園や保育所、認定こども園に訪問し、観察実習や参加実習を行っていた。

(2) **研究倫理** 本研究は、参加者が履修している授業の一環として実施した。全ての授業が終了した後に、参加者に対して、研究目的と意義、データの公表時のプライバシーの保護、公表するデータの内容、予想されるリスクと対処、研究成果の公表先、研究協力は自由意志であり、途中で辞退できることについて口頭にて説明し、同意を得た。

(3) **利益相反の開示** 開示すべき利益相反関係にある企業等は存在しなかった。

(4) **研究材料** 本研究では、保育学初学者が評定する保育者特性および社会人基礎力に対する省察の特徴を探索するために、2つの尺度を用いた。1つ目は、保育者特性インベントリ¹⁸⁾ ¹⁹⁾であった。保育者特性インベントリは、保育者としての特性を知識や技能といった専門的な技量からではなく、パーソナリティ特性から総合的に分析をする評定尺度である。7つの因子構造（愛他性、共感性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力、養育性）が確認されている。参加者は、全49項目の質問に対して、「いつもの自分にどの程度あてはまるか」を5段階（「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」）で評定した。

2つ目は、社会人基礎力尺度²⁰⁾であった。社会人基礎力尺度は、経済産業省が提案する「社会人基礎力」と文部科学省が提案する「キャリア発達にかかわる諸能力」に基づいて作成された評定尺度である。4つの因子構造（効果的に伝える力、人や環境に働きかける力、協調する力、考える力）が確認されている。参加者は、「～する力」と記載された37項目に対して、「自分にそれぞれの力があると思うか」を4段階（「十分にある」～「全くない」）で評定した。本研究では、オンライン授業においてデータ収集を試みたため、Google スプレッドシートに質問項目を転記し、参加者に回答を求めた。

(5) **手続き** 第1学年の6月に、参加者が履修する授業において保育者特性尺度および社会人基礎力尺度を配布した。配布時には、Google スプレッドシート上での回答方法を説明した。配布から1週間後の授業において回収した。本研究では、これらの尺度の結果から参加者が自己の特性を省察し、大学卒業時において目指す姿（長期目標）、この先3ヶ月以内に目指す姿（短期目標）をどのように記述するかを把握した。

回収時に各尺度の結果の解釈の前提として、①結果は参加者の主観であり、教員や仲間からの客観的な評価ではないこと、②初学年であるため低い値があっても当然であること、③低い値があっても周囲のサポートや高い値の能力の活用で補えること、④集団内ではなく個人内での能力間の比較を行うことを説明した。そして、各尺度の因子が表す能力を藤村¹⁹⁾ や大対ら²⁰⁾ の記載を基に解説した。なお、参加者が各尺度の結果を視覚的に把握しやすいように、レダーチャートを用意した。参加者は各因子得点を入力することで、各尺度の因子得点の高低のバランスを視覚的に理解できた。

本研究では2つの尺度の評定結果に対する省察特徴を把握するために、参加者に書記言語で次の事項を記述するよう求めた。記述内容は、①2つの尺度の結果をふまえた自身の客観的な特性（省察）、②卒業後に目指す社会人としての姿（長期目標）、③この先3ヶ月以内に実行可能な複数の具体

的目標（短期目標）であった。①や②は、それぞれ200字程度で記述するように伝えたが、③については目標数が参加者毎に異なると予想されたため、字数制限を設けなかった。参加者には、これらの①～③の項目を1週間以内に Google ドキュメントで入力するように求めた。

(6) データ分析 本研究では、保育学初学者が評定する保育者特性インベントリィおよび社会人基礎力尺度の得点の高群・低群における省察の特徴を探索するために、以下の3つの手順で分析を行った。第1に、2つの尺度得点を基に高群・低群に分けた。群分けにあたり、保育者特性インベントリィおよび社会人基礎力尺度の総合得点の相関係数を算出し、無相関検定を実施した。その結果、相関係数0.699であり、無相関検定の結果0.1%水準で無相関の帰無仮説は棄却された。よって、保育者特性インベントリィと社会人基礎力尺度には正の相関が高い確率で認められた。そこで、両尺度の中央値よりも高い値を示した参加者を高群、中央値よりも低い値を示した参加者を低群に振り分けた。最終的に、高群には11名、低群には12名の参加者が割り当てられた。各群ともに保育者特性インベントリィの尺度得点の中央値は、「愛他性」や「共感性」の尺度得点が「論理的思考性」「社交性」「行動力」よりも高くなる傾向が認められた。社会人基礎力尺度においては、各群ともに「効果的に伝える力」や「人や環境に働きかける力」が「考える力」「協調する力」よりも高くなる傾向があった。

第2に、参加者が書記言語で記述した省察等について計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析には、KH Coder³²¹⁾を用いた。略語や同義語を変換し、強制抽出語と分析除外語を指定し、省察、長期目標、短期目標の3項目について、高群・低群毎に単語を抽出した。助詞や助動詞を除いた延べ語数、語の種類を表す異なり語数を使い、Carrollの修正版タイプ・トークン比（CTTR）を算出した。CTTRは、延べ語数の2倍の平方根における異なり語数の割合であり、数値が高いほど多様な語彙が使われていることを示す。異なり語数を延べ語数で除すTTRよりも文章の長さの影響を受けにくいことが指摘されているため、本指標を使用した。

第3に、高群・低群に特徴的に頻出した単語の原文を参照し、高群と低群の省察特徴を分析した。先の計量テキスト分析にて抽出した名詞、サ変名詞、形容動詞、形容詞を対象に、外部変数を尺度得点高群・低群に設定して対応分析を行った。対応分析は、各群における単語の出現割合から χ^2 距離を計算し、散布図に図示する方法である。原点から外部変数の方向に離れた単語ほど強い特徴のある単語であると解釈できることから、分析過程の客観性を高めるために対応分析を実施した。

3. 結果

(1) 省察シートに記述された抽出語のCTTR Table 1に、尺度得点高群・低群の参加者が省察シートに記述した抽出語のCTTRを記した。保育者特性インベントリィおよび社会人基礎力尺度において中央値よりも高い尺度得点であった高群の参加者は、省察、長期目標、短期目標と後半の項目へいくに従いCTTRが高くなる傾向があった。一方、低群の参加者のCTTRは、省察、短期目標、長期目標の順で高くなっていった。高群と低群のCTTRの差を算出すると、省察では-.19、長期目標では-.10、短期目標では+.65というように、短期目標のCTTRの差が最も大きく、高群の方が高い値であった。つまり、短期目標の記述において、高群には多くの種類の単語が出現していたといえる。

Table 1 尺度得点高群・低群のCTTR

	高群 (n = 11)			低群 (n = 12)		
	省察	長期目標	短期目標	省察	長期目標	短期目標
総文字数	2,594	2,227	1,703	2,368	2,483	1,408
延べ語数 (N)	614	519	415	580	610	355
異なり語数 (V)	229	234	224	229	257	190
CTTR (V/√2N)	6.53	7.26	7.78	6.72	7.36	7.13

(2) 高群・低群における抽出語の特徴 Figure 1 に、「省察」において頻出した抽出語を対象に、高群・低群との対応分析の結果を図示した。散布図に布置される語数が20程度になるように、8以上出現した語を対象にした。図中の円は出現度数を表しており、円が大きくなるほど出現度数が多い。低群の方向には、「特徴」「苦手」「論理的」といった抽出語が布置された。「苦手」の原文を参照すると、高群の参加者では論理的思考や他者との円滑な関係構築、年上の保護者へのかかわりにおいて用いられていた。これに対して、低群の参加者では論理的思考の他にも、他者の感情の推測や他者と行動すること、他者の前でパフォーマンスすることにおいて用いられていた。また、高群の参加者は苦手なことを整理したうえで、改善や克服をしていく意思を記述していたのに対し、低群には苦手なことを列挙することにとどまる参加者もいた。

高群の方向には、「子ども」「養育」「得点」「共感」といった抽出語が布置された。「子ども」の原文を参照すると、高群の参加者のなかには、子どもとのかかわりや信頼関係の構築のために活かせる特性や課題となる特性を振り返る者が低群よりも多かった。また、高群の参加者は低群よりも保育者特性インベントリにおける共感性や養育性の尺度得点に注目する者が多かった。

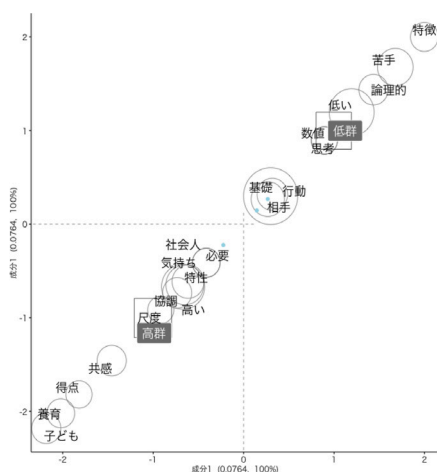


Figure 1 省察の対応分析

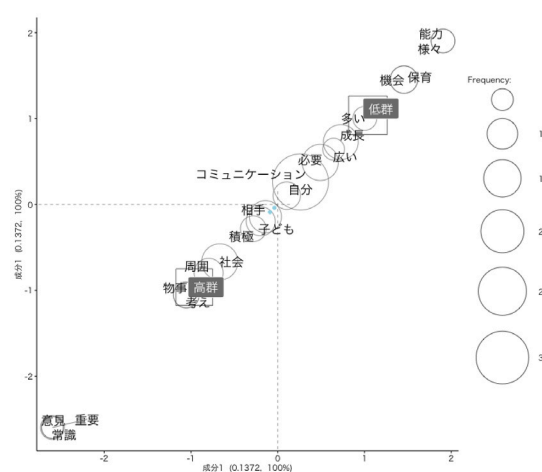


Figure 2 長期目標の対応分析

Figure 2 に、「長期目標」において頻出した抽出語を対象に、高群・低群との対応分析の結果を図示した。散布図に布置される語数が20程度になるように、5以上出現した語を対象にした。低群の方向には、「様々」「能力」「保育」「機会」といった抽出語が布置された。原文を参照すると、低群の

参加者は社会人になると様々な人とかかわる機会が多くなること、保育者となるうえでコミュニケーション能力や論理的思考性を高めていきたいことを記述する傾向があった。

高群の方向には、「意見」「重要」「常識」「考え」といった抽出語が布置された。原文を参照すると、高群の参加者は将来的には意見を周囲に伝えられるようになりたいこと、意見を伝えるだけでなく相手の意見も尊重したいことを記述していた。「重要」や「常識」は特定の参加者が反復して使用していたため、原文については言及しない。

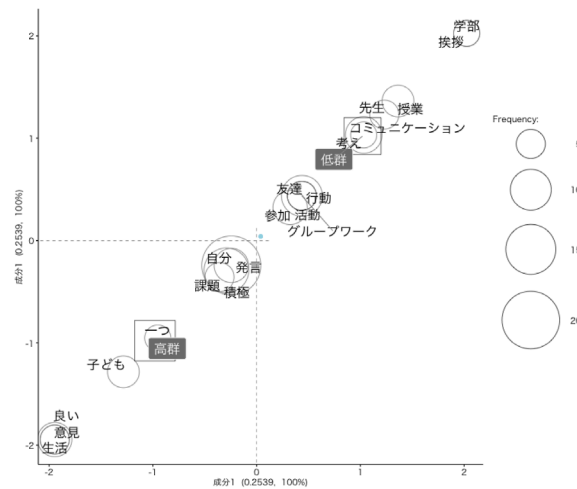


Figure 3 短期目標の対応分析

Figure 3 に、「短期目標」において頻出した抽出語を対象に、高群・低群との対応分析の結果を图示した。散布図に布置される語数が20程度になるように、4以上出現した語を対象にした。低群の方向には、「学部」「挨拶」「授業」「コミュニケーション」といった抽出語が布置された。低群の原文を参照すると、他学部の学生とのコミュニケーションや授業において他者に話しかける、初対面の人に自ら挨拶するといった他者との関わりについての具体的な目標が記述されていた。

高群の方向には、「意見」「生活」「良い」「子ども」といった抽出語が布置された。高群の原文を参照すると、授業以外にも日常生活において複数の視点から考える習慣を身につけること、まずは少人数のグループで意見を発言すること、自分や相手の良かった点を見つけること、子ども関連の書籍を読んだり、子どもの行動の意味を多角的に考えたりするなどの記述が確認できた。

4. 考 察

本研究は、幼児教育・保育学を専攻する初年次の大学生の省察特徴を探索するために、保育者特性インベントリおよび社会人基礎力尺度の結果をもとに、参加者に自己の特性、大学卒業時に目指す長期目標、長期目標を達成するための短期目標の記述を求めた。記述内容の計量テキスト分析の結果、尺度得点の高群では省察、長期目標、短期目標の順に単語の種類が多くなる傾向があった。低群の短期目標において出現した抽出語の種類は、高群よりも種類が限られていた。

各群に頻出した抽出語から原文を参照すると、高群は省察の段階で子どもや保護者とのかわりなどの保育実践をイメージしながら自身の特性を振り返り、長期目標では他者への意見の表明や他者の意見の理解、短期目標では授業以外の生活においても意見を発言することや子どもの行動の多角的な

理解を記述する傾向があった。一方、低群は省察の段階で現在のコミュニケーション能力や論理的な思考の苦手さについて言及し、長期目標ではこれらの苦手な能力の向上を設定し、大学の授業において達成可能な短期目標を定めていた。

尺度得点の高群・低群において省察の特徴が異なったことには、省察対象の時間軸と方向の影響が考えられる。第1に、省察対象の時間軸、つまり将来の理想自己と現在の現実自己の観点から検討する。高群は、自己の特性を省察する段階で、子どもや保護者とのかかわりに自己の特性をどのように活かせるか、またはどのような課題があるかを具体的に記述していた。つまり、将来のキャリアに対して具体的なイメージをもっていた。千島¹⁴⁾は理想自己に変わった後を具体的にイメージし、変容のための計画を立てることで進路への自信が高まると述べている。本研究において保育者特性や社会人基礎力を高く評価した参加者は、自己評価の低い参加者よりも理想自己をキャリアと関連させてイメージし、自己の特性を振り返った可能性がある。

対照的に、低群は子どもや保護者とのかかわりの点から自己の特性を省察することは少なく、大学での学生生活における他者とのかかわりや他者の感情理解の苦手さを記述していた。学生生活における現実自己の観点から自己の特性を振り返っていたと言える。卒業後のキャリアというよりも、現在の自分とは一体何者なのかを深く追求している段階だと考えられる。大学生は、中学生や高校生よりも自己の否定的な部分も含めて見つめ直す内省力が上昇する¹³⁾。佐藤・落合²²⁾が指摘するように、自己の否定的な側面を見つめ直すことは、自分を「見られる自己」として客体化する能力が発達している証である。自分の特性を低く見積もった学生は、現実自己を見つめ直す青年期の課題に立ち向かっている最中なのであろう。

注意しなければならないのは、自己評価の高かった参加者が内省力も高いとは限らないことである。千島¹³⁾によると、内省力の低い段階では自分自身を見つめる機会が少なく、現在の自分に問題を感じない傾向がある。太田・遠藤¹⁶⁾でも、実践に対する自身の思考について省察した参加者は、子どもの反応などの観察が容易な相互作用を省察した参加者よりも、実習の達成を低く見積もる傾向があった。本研究の高群の参加者は、自身の課題となる側面も記述していたことから、自分自身を見つめ直していたと考えられるが、本研究では内省力の深さについては検証できていない。今後、内省力の水準から省察の特徴を探索することも有用であろう。

高群・低群において省察の特徴が異なった理由として、第2に省察の方向の影響が考えられる。先行研究¹⁸⁾と同様に、両群ともに保育者特性インベントリィの尺度得点の中央値は、「愛他性」や「共感性」の尺度得点が「論理的思考性」「社交性」「行動力」よりも高くなる傾向が認められた。社会人基礎力尺度においては、両群ともに「効果的に伝える力」や「人や環境に働きかける力」が「考える力」「協調する力」よりも高くなる傾向があった。高群・低群ともに保育者特性インベントリィや社会人基礎力尺度の得点の傾向は同様だったにも関わらず、高群の参加者は個人内で相対的に高い「共感性」や「養育性」の得点に注目して自己の特性を記述する傾向があった。一方、低群の参加者は個人内で相対的に低い「論理的思考性」の得点について、その具体例や理由を記述する傾向があった。

このように、自己の特性を高く評価した参加者は自己の強みとなる特性を記述していたのに対して、低く評価した参加者は自己の弱みとなる特性に注目していた。省察の方向が、肯定的な側面と否定的な側面に分かれていると言える。この省察の方向に影響する要因の一つに自己肯定感が考えられる。自己肯定感、ありのままの自分を受け入れる自己受容やアイデンティティの感覚と正の相関が認められている¹⁷⁾。また、自己肯定感が上昇すると現在の自己を維持するメリットを認知することも

高まる¹³⁾。本研究の高群の参加者は、肯定的な側面も否定的な側面も全てを含めて自己を受け容れ、変わらないことのメリットも認識しているため、自己の強みとなる特性に注目した可能性がある。

仲野・桜本¹⁷⁾は、「自分探しの心理学」という授業における大学1年生の自己肯定感や自己受容、アイデンティティの変化を報告している。受講前から自己肯定感の高い学生は、授業を通して自己受容測定尺度や多次元自我同一性尺度の尺度得点が上昇したのに対して、自己肯定感の低い学生は受講前に比べて自己肯定感が上昇したものの、自己受容尺度や多次元自我同一性尺度には変化がなかった。このことは、自己肯定感の低い学生に対しては、授業において自己を発見する機会を提供するだけでなく、より個別的で集中的な支援の必要性を表している。自己肯定感の低い学生がキャリアもふまえて将来の理想自己をイメージしていくためには、どのような指導が望まれるだろうか。先述したように、自己の特性を低く評価する学生は、現実自己と対峙している可能性がある。自分から目をそらすことなく、自己を見つめ直し、全体としての自分を受容できたとき、自分への評価が高まるであろう。

キャリア探索をともなうアイデンティティの形成過程では、進路選択に対する自己効力感や結果期待、自律的な動機づけが探索行動に影響する²³⁾。つまり、学生が進路選択において具体例をイメージすることや将来の目標に向かう途中の困難を解決すること、具体的な計画を立てる能力に自信を持つことがキャリア探索を促し、アイデンティティの形成に向かう。そして、周囲の友人や親から言われてキャリア探索をするのではなく、キャリア探索の先に成長があることを信じ、自身の目標達成が動機づけとなり、さらにはキャリア探索に楽しみを感じる事が望まれる。

自己効力感を提唱した Bandura²⁴⁾によれば、自己効力感は直接的な達成経験のみならず、観察学習を通じた代理経験や周囲からの励まし、自身による情動調整によっても高まる。キャリア探索を支えるために、キャリアを探る直接的な達成経験のみならず、キャリア探索を行ってきた経験者や自身と同じ境遇にいるピアからの観察学習、キャリア探索に対する励まし、自身の不安や緊張を和らげるリラクゼーション法の指導など、様々なアプローチが効果的であろう。キャリア探索に対する自己効力感や自律的な動機づけが高まることで、自己に対する肯定的な省察が増え、否定的な側面も全てを含めて自己を受け容れ、自己の強みに一層注目できると考える。

本研究は保育学初学者を対象に、自己の特性に関する評価の高低と省察の特徴との関連を探索し、省察対象の時間軸と方向性に異なる特徴があることを示したことに意義がある。しかしながら、以下の課題が残っている。まず、研究知見の一般化に限界があることがあげられる。本研究は、A大学において幼児教育・保育学を専攻する初学年を対象に実施した。保育者を養成する機関は、短期大学や専門学校などの高等教育機関も存在する。さらに、四年制大学であっても学力水準にばらつきはある。そのため、本研究で認められた省察特徴が他の高等教育機関で保育学を学ぶ学生に一般化できるとは限らない。保育者の養成課程を設置する様々な高等教育機関の学生に調査対象を拡大することで、高等教育機関の種別や属性による省察特徴の共通性と固有性を検討できると考える。次に、本研究では省察特徴の発達のな変化について検討できていない。学生の省察の発達のな変化を把握することで、養成段階から採用、研修までの円滑な指導を目指せるであろう。省察が高次化していくためには、実習などの体験的な学習を経験するだけでなく、学びにつなげる授業の質が影響する。発達のな変化をもたらす高等教育機関の授業の質も同時に検討していく必要がある。

謝 辞

本研究にご理解・ご協力いただきました学生の皆様に記してお礼申し上げるとともに、皆様の益々のご活躍をお祈りいたします。

引用文献

- 1) 高知県教育委員会 (2016) . 高知県教育・保育の質向上ガイドライン . Retrieved from <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311601/2017051800334.html> (2021年9月30日)
- 2) 信州幼児教育支援センター (2021) . 保育者育成指標1.0. Retrieved from <https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyogaku/documents/ikuseishihyou1.pdf> (2021年9月30日)
- 3) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 (2006) . 保育者としての資質向上研修俯瞰図 . Retrieved from <https://youchien.com/research/training/> (2021年9月30日)
- 4) 全国保育士会 (2010) . 保育士の研修体系—保育士の階層別に求められる専門性—. Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0226-5f.pdf> (2021年9月30日)
- 5) 保育教諭養成課程研究会 (2016) . 「新採ギャップ」に関する研究—幼稚園教員養成校学生との比較—. Retrieved from http://youseikatei.com/pdf/20160602_4.pdf (2021年9月30日)
- 6) 中央教育審議会 (2021) . 「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について (諮問) . Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1415877_00001.htm (2021年9月30日)
- 7) 杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃 (2009) . 保育における省察の構造 . 幼年教育研究年報 , 31, 5-14.
- 8) 朴信永・杉村伸一郎 (2006) . 子育てにおける親の省察モデルの検討 . 広島大学大学院教育学研究科紀要 . 第三部 , 教育人間科学関連領域 , 55, 373-381.
- 9) 上山瑠津子・杉村伸一郎 (2015) . 保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連 . 教育心理学研究 , 63 (4) , 401-411.
- 10) 荒井庸子 (2016) . 保育者を目指す学生における省察力—省察の特徴と省察力に関わる要因の検討—. 浜松学院大学教職センター紀要 , 5, 15-30.
- 11) 金子智昭 (2019) . 保育者養成校における地域連携授業に関する実践的研究—学生の省察が自己認識の変容に及ぼす影響—. 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 , 87, 131-144.
- 12) 横尾暁子・高嶋景子 (2016) . 子ども理解の深まりを支える授業実践の試み—「保育実践入門」の成果と課題—. 田園調布学園大学紀要 , 11, 295-307.
- 13) 千島雄太 (2015) . 青年期における自己変容のメリット・デメリット予期に伴う葛藤—学校段階による比較—. 発達心理学研究 , 26 (1) , 1-12.
- 14) 千島雄太 (2016) . 青年期における自己変容に対する志向性の個人差と年齢差—進路課題への自信との関連も含めて—. 筑波大学心理学研究 , 52, 97-107.
- 15) 千島雄太 (2016) . 自己変容の想起がアイデンティティ形成に及ぼす影響 . 教育心理学研究 , 64 (3) , 352-363.
- 16) 太田研・遠藤愛 (2017) . 特別支援学校教育実習生のリフレクション特性に関する探索的検討—実習日誌のテキスト・マイニングを通して—. 星美学園短期大学日伊総合研究所報 , 13, 74-77.
- 17) 仲野好重・桜本和也 (2010) . 大学一年生にとっての「自分探し」とは何か?—初年次教育とし

- ての自己発見授業とアイデンティティの模索一. 大手前大学論集, 10, 177-195.
- 18) 藤村和久 (2010) . 保育士, 幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成. 大阪樟蔭女子大学 人間科学研究紀要, 9, 129-143.
 - 19) 藤村和久 (2012) . 保育者特性インベントリィ (NTI) の標準化. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 2, 23-33.
 - 20) 大対香奈子・堀田美保・本岡寛子・直井愛里 (2018) . 大学生の社会人基礎力測定尺度の開発. 近畿大学総合社会学部紀要, 7 (1) , 51-59.
 - 21) 樋口耕一 (2020) . 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版. ナカニシヤ出版.
 - 22) 佐藤有耕・落合良行 (1995) . 大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴. 筑波大学心理学研究, 17, 61-66.
 - 23) 吉崎聡子・平岡恭一 (2015) . 自己決定理論に基づく動機づけと自己効力感からみたキャリア探索. 心理学研究, 86 (1) , 55-61.
 - 24) Bandura, A. (1977) . Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84 (2) , 191-215.

Reflection Characteristics of Nursery Trait and Essential Competencies by Undergraduate Students Majoring in Early Childhood Education and Care

Ken Ota^{*1}, Mikako Torii^{*1}, Shoko Furuya^{*1}

Key words :

undergraduate students majoring in early childhood education and care, nursery trait, essential competencies, reflection

* 1 Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University